

第19回国際宗教学・宗教史 会議世界大会報告

渡邊 学編

WATANABE Manabu

第19回国際宗教学・宗教史会議世界大会（IAHR）が全世界から1500名以上の参加者を集め、東京高輪プリンスホテルにおいて3月24～30日の日程で開催された。会員以外の聴講者は300名を越え、名実ともに同学会史上最大の大会となった。また、大会運営やプログラム構成の点でも絶賛を浴び、ロザリンド・ハケット新会長（テネシー大学教授）からも今後の大会の模範となるであろうとのコメントを受けたほどであった。

本研究所では、当初から研究所を挙げて本大会に協力してきた。それは、本研究所が宗教研究における国際協力の促進をめざしてきたからである。

本研究所は、1999年に日本宗教学会第58回年次大会を開催するに当たり、アメリカ宗教学会の代表者3名を招聘して国際シンポジウムを開催した。その後、渡邊所員がアメリカ宗教学会国際委員会委員に指名され、2000～2003年の間、委員を務めた。その間、2001年にデンバー大会において特別トピックフォーラム「オウム事件以降の宗教と社会」を開催し、2003年11月にはアメリカ宗教学会本部のあるアトランタ開催の年次大会において、島蘭進日本宗教学会会長をはじめとして日本から30名の参加者を得て「日本の宗教学者と宗教学」特集を成功裏に開催したのであった。

第19回国際宗教学・宗教史会議世界大会そのものの準備に関して言えば、ハイジック所員は、組織委員会委員を務め、スワンソン、渡邊、奥山の三名は実行委員会委員、また、渡邊は日本学術会議組織委員会委員も兼務した。そして、本研究所は、国際会議においていかにパネルを組織し発表するかのガイダンスを、大会本部のある東京大学以外で唯一、2004年1月11日（日）に開催したのであった。

また、奥山所員を中心として海外研究者の招聘に尽力し、さまざまな機関の援助により、

アジア・アフリカを中心として数十名を招くことができた。その成果の一端がIAHR直前に南山大学南山宗教文化研究所において開催した国際シンポジウムであった。

以下において個々のスタッフがどのように参加したかについてまとめることにしたい。

なお、ほとんどのパネルは英語で行われたが、ここでは便宜上、すべて日本語で表記することにす。

ポール・スワンソン 所長

「法華経と平和」 3月25日(金) レスポ
デント

特別全体会議「日本の宗教と宗教研究」 3
月27日(日) 司会

映画上映 是枝裕和監督作品『ワンダフル・
ライフ』『ディスタンス』 3月27日(日) 司会
進行

「仏教における平和研究」 3月29日(火)
司会

ジェームズ・ハイジック 第一種研究員

講演会「上田閑照〈自己〉の現象学——十
牛図を手がかりに」 3月28日(金) 司会・通
訳

「宗教間対話の再考——さまざまな課題と新
たな方向性(2)キリスト教の再考」 3月25日
(金) レスポデント [英語のパネル]

「神秘主義と暴力」 3月26日(土) パネル
組織・司会

本パネルにおいては、神秘主義の伝統が暴力(個人への暴力、社会秩序への暴力、自然への暴力)とその克服に関して何を語るべきか考察することを提案する。特に、現代の人物(エディット・シュタインやシモーン・ヴェイユ)についての発表、古代の東方のキリスト教思想家(ヨハネス・カッシアヌス)についての発表、イスラームの伝統と比較したスペインの古典的神

秘家(十字架のヨハネやアヴィラのテレサ)についての発表が用意されている。各発表者には15分から20分を与え、その後参加者間の意見交換と聴衆席との自由討論を行う形式をとる。[英語のパネル]

ロバート・キサラ 第一種研究員

パネル「日本の新宗教運動における〈暴力〉
再考」 3月25日(金)

「戦時中の宗教」 発表

戦後、「平和」が日本の宗教組織の中心的テーマになったが、このような宗教組織の多くが戦前、活発に日本の戦争遂行を促していたことは、よく知られた事実である。実際の政治と国際関係においても宗教による戦争の正当化は、大きな役割を果たしている。本発表では第二次大戦中における日本の諸宗教を例として取り上げ戦争に関する宗教のレトリックについて探る。その際、この特定の事例にのみあてはまることだけではなく、他宗教と共通するテーマについても触れてみたい。[英語のパネル]

パネル「現代日本における価値観」 3月26
日(土) パネル組織・司会

The European Values StudyとWorld Values Studyは価値観研究の分野における基準となった。2001年、これらの研究にならった調査が日本で行われた。比較可能性を考慮に入れて、上記の研究と同じ質問を多数使用し、また一方でしばしばアジア特有の価値観と想定されるものを測るために、いくつかの新しい質問が調査に組みこまれた。この調査は今日の日本における価値観の包括的な研究を可能にし、宗教から仕事、家族、政治に至る項目、さらには一般的な気持ちを問う項目まで含んでいる。本パネルでは、伝統的価値が今日どのように見られているか、また現代日本において宗教的態度がどのように発達したか、仕事に対する価値

観はどのように表現されているか、どのような価値観が家庭生活と関係しているのか、といった研究を通して、現代日本における価値観の姿を描き出していきたい。[英語のパネル]

パネル「日本の社会参加仏教」3月28日(月)
「テロに対する日本の仏教者の反応」発表
戦後日本において、平和は宗教、そして文化一般の中心テーマであった。だが、9.11後の動向として、日本における軍隊と安全保障条約の再検討を行おうという動き、特に、いわゆる平和憲法を改定しようという動きがある。日本における宗教教団、特に仏教教団は、こうした状況にどのように答えたのだろうか。私は以前、平和に関する日本の宗教の態度について調査をおこなった。この発表ではその調査に基づき、テロ攻撃に対する昨今の関心が、日本の仏教教団によって推進されている平和活動・平和理念に対して、どのような影響を及ぼしたのかを考察する。[英語のパネル]

奥山倫明 第一種研究員

パネル「宗教間対話の再考——さまざまな課題と新たな方向性 (1) 衝突から対話へ?」3月25日(金) パネル組織

世界各地で宗教間の葛藤が増大しているが、このことは個々の宗教が自己を回顧、精査することを求めるとともに、対峙してきた諸宗教間における相互理解の深化を期待する声の高まりをも生み出している。制度宗教、組織宗教間の緊張緩和を願う対話の精神は、対話に携わる個人の人々に新たな豊かさをもたらし、対話の拒絶は諸宗教の伝統が相互に提供しうる豊かな源との接触を閉ざすこととなる。

本パネルは、今日、宗教間対話が遂行されているさまざまな国の多様な現場を再考することを目指すものである。アジア、ヨーロッパ、アメリカの各地で対話の研究、あるいは実践に携わる研究者を招き、それぞれの現場にお

ける経験と知見を共有するための方法を検討してゆく。さらに、組織レベルでの、あるいは個人レベルでの対話の失敗についても反省を加えてゆく。

セッション1は「衝突から対話へ?」を副題とし、セッション2は「キリスト教の再考」を副題とする。[英語のパネル]

パネル「宗教間対話の再考——さまざまな課題と新たな方向性 (2) キリスト教の再考」3月25日(金) パネル組織・司会 パネル要旨同上

パネル「宗教と日本現代文学」3月26日(土) 司会 [英語のパネル]

パネル「ヨーロッパにおけるムスリムと人権」3月26日(土) パネル組織・司会

過去30年ほどにおけるムスリム移民の西欧への流入を経て、今日、1500万人ほどのムスリムが西欧に居住していると言われる。ムスリム移民の社会統合のレベルは国ごとに異なるが、EUの発展とともに、ヨーロッパのイスラームは、ヨーロッパ全体にとって共通の課題を提示している。

イスラームはヨーロッパにおいては少数派の宗教であるため、西欧への定住はムスリム自身にとって社会と文化への適応という点でさまざまな問題を投げかけている。一方、ヨーロッパの社会と文化にとっても、他の市民が享受している諸権利を、この新たな隣人たちにいかにして確保するかという点で課題は多い。この点で、ヨーロッパのムスリムにとっての人権という問題が浮上してくる。本パネルでは、ヨーロッパの研究者と日本の研究者がいくつかの視点から関連する諸問題を論じ、イスラームを背景とする研究者によるコメントを踏まえて、議論を深めることを目指している。[英語のパネル]

パネル「米国宗教多元主義とイスラームをめぐる批判的再検討」3月29日(火) パネル組織

近年、複数の世界観や価値観の出会いの機会が増大し、緊張や葛藤の可能性が高まっているが、そうした出会いはまた、異なる価値観や信念が共存し、場合によって高めあう機会も含んでいる。現代のアメリカ合衆国における宗教多元主義は、宗教が社会を構築・維持する上で果たす大きな役割を示すが、特に従来、キリスト教的価値観によって支配されてきたアメリカ人の生活の諸相において、今日、ムスリムたちが重要な役割を果たしつつある点は注目に値する。

米国国務省主催のフルブライト・プログラム「合衆国の宗教——多元主義と公共性」(2002-04)への参加者たちは、米国の今日の宗教状況、とりわけ9・11事件以降の状況について、現地で見聞を深め、考察を進めてきた。本パネルは、同プログラムへの参加者のうちイスラームを背景とする研究者を招いて議論の継続を図り、米国のイスラームに関する専門家と議論を深めることを目指す。[英語のパネル]

渡邊 学 第一種研究員

全体会議(1)「戦争と平和、その宗教的要因」 3月25日(金) レスポンデント

東西宗教交流学会主催パネル「絶対者における人格性と非人格性」 3月25日(金) パネル組織・司会

一般にキリスト教の神は超越的人格であり、仏教の法は内在的非人格的であるとされている。しかし新約聖書における神・キリスト・聖霊には内在的超越の面があり、内在面では非人格的である。他方、仏教における如来には超越的内在の面があり、超越面では人格的である。また中近東起源の三大人格主義的一神教には他宗教を真理と認めない非寛容性が強く、仏教は他宗教を「外道」としていやしめはするが、他宗教を滅ぼしたり、他宗教の信徒を自宗に改宗させたりする傾向が比較的小さ

いといわれる。それは人格主義的宗教の場合、神は預言者などを通して人間に対して神意を告げ、信徒はそれをただ「信じる」ことになる結果、絶対化が起こりやすく、仏教の場合は各仏教徒が内的な悟りを求める結果、他者に対する教義の強制が起こりにくいという。しかし仏教でも宗派の開祖の思想は権威をもつ。神と法が人間の人格性に対して持つ意味についても、再検討が必要である。[英語のパネル] [* 趣意書作成者：八木誠一氏]

抗争とコミュニズム：世界宗教における暴力をめぐる台湾からの視点：3月26日(土) レスポンデント [英語のパネル]

パネル「宗教対立の国際比較(1) カルト/セクト論争の再検討——グローバルな視点から」国際宗教社会学会主催 3月28日(月)

「救済と暴力」 発表

多くの宗教は何らかの形で信者の救済を約束する。それだけでなく、ある宗教は信者以外の救済も志向する。例えば、キリスト教の愛(アガペー)や仏教の慈悲は、信者の枠組みを超えた救済の働きを意味する。愛や慈悲は、多くの場合、それらを施された者によって癒しや恵みとして受け入れられる。その意味で、これらは施す者と施される者の両者にとって共約可能性を持っている。しかしながら、施す側にとっては救済行為であったとしても、施される側にとってはそうは受け取られない行為も多くみられる。例えば、仏教の調伏がそれである。調伏には、一方で内面的に自らの身心を制御させる意味があるが、他方で外にいる敵意のある者を教化したり障害をもたらす者を打破したりすることを意味する。恐ろしいのは、このような調伏の概念がむやみに拡大解釈されることであり、オウム真理教がもたらした災厄もこのような文脈から理解することができる。[英語のパネル]

フェリペ・ムンカダ 第二種研究所員

パネル「現代日本における価値観」 3月26日(土)

「日本における労働態度」 発表

日本経済はやっと復活の兆しを見せ始めた。消費販売は好転し始め、破産件数も減少している。われわれの調査が1998年と2001年に行われたときには、展望は非常に悲観的であった。失業率はその間ずっと高く、会社の倒産件数も同様であった。本稿が様々な日本人の労働態度を調べたのはまさにその時期である。われわれは被験者たちに彼らの態度について、例えば、「自分の仕事へのプライド」、「仕事の安定」感、「意思決定」、「自分の仕事に対する満足」を、その他の質問と一緒に尋ねたのである。またわれわれは、仕事場での個人的な関係とプロ意識、そして仕事と奨励と間にある様々な状況下での葛藤を調べた。就業機会が少ない時期において仕事がどれくらい優先されるのかも調査した。本稿はその二つの時期に、性別や職種の内部でその優先度が異なっているか、あるいはそれが欠落しているかという固題を探索している。当初の成果によれば、経済的困難に直面していても容易には変化しない態度があることが示されている。なぜいくつかの態度は変化し、他のいくつかは変化しないのだろうか。著者は労働態度における変化を助長したり減少させたりする要素のいくつかを提示したい。

ドミンゴス・スーザ 第二種研究所員

パネル「〈悪の自覚〉と現代社会——親鸞思想を中心として——」 3月26日(土)

「キリスト教思想との比較」 発表

人間生活全般に渡る根本的な悪への目覚めは、親鸞の思想の核心に位置している。親鸞において、悪とは単に善と対照的な現実や自己のある特定の行為ではなく、存在そのものが、

無明や自己に対する執着から生起している悪なのである。人間存在が自己に対する執着という悪から自らを引き離すために何もできない一方で、信心という阿弥陀の贈り物によって、自身の仏性への目覚めを獲ることができる。この阿弥陀の贈り物(信心)は、全く新しい生活と衆生への慈悲(共感)の感覚を生じさせる。しかしながら問題は残る。信心の経験は、経験的な人間を行為主とした行為というよりもむしろ阿弥陀仏の用きなのだが、それが「～すべき」という倫理観、すなわち積極的な倫理的意志や世界の出来事を変革していく視野を与え(規定し)得るのかどうかということである。私の発表では、信心と社会的活動との関係の諸問題をキリスト教思想との対話の中で考察してみたい。

ベンジャミン・ドーマン 編集員

パネル「日本の新宗教運動における〈暴力〉再考」 3月25日(金)

「メディアによる〈いじめ〉と新宗教運動：暴力か徳行か?」 発表

この発表は、オウム以後、新宗教運動に関して週刊誌がどう報道しているかについて取り上げ、暴力の一形態としてのメディアによる「いじめ」(個人・集団をメディアが虐げること)を論じる。かつてある日本の大衆週刊誌の記者は、有力大手出版社が市場での売上を伸ばすために採った戦略を、メディア「いじめ」という語を用いて表現した。新宗教運動は、メディア一般によって否定的に扱われてきた歴史をもっているのだが、今や多くの週刊誌の定期的なターゲットとなっている。このような週刊誌のあり方に支持を示す人々は、こうした出版のおかげで、「記者クラブ体制」やその他社会的な制約によって大手のメディアではほとんど報道されることのない本物のニュースを知ることができる、と述べる。他方、週刊誌を批判する側は、

こうした報道が人権を蹂躪し、自由を濫用し、不必要な社会的関心やヒステリーの引き金となってしまうと主張している。[英語のパネル]

パネル「宗教、平和、メディア」 3月28日(月)
パネル組織

このパネルは、「宗教」、「平和」、「メディア」という三つの広いカテゴリーの間に存在するさまざまな相互的連結と収斂を研究する際に立ち現れうる幾つかの緊張、矛盾、逆説について考究することを目的とする。これら三つのチームについて鑑みると、それらの定義自体についてのみならず、それを定義する者は誰なのか、その語はどのような目的のために使用されているのか、という問いが持ち上がるのは不可避である。メディアによる報告が、ある人々によって普遍的であるとみなされるものの、他の人々によっては異議を唱えられるような諸価値を反映する仕方についての諸問題を考察するとき、このような問いは決定的なものとなる。とりわけ戦争の最中に、あるいはその結果を受けて、相互に対比的に存立するさまざまなチーム——自由と抑圧、平等と不平等、民主制と専制——が、しばしば多様なメディアによって、特に宗教と平和に関して用いられている。理論的な展望と共に日本と米国に特に関連する歴史的かつ現代的な諸事例を用い、またサイバースペースにおける宗教的暴力に関する議論も加えて、これらの諸発表では、込み入った幾つかの問題を特定することを試みる。[英語のパネル]

「平和か抑圧か? : 占領下日本における宗教報道」 3月28日(月) 同パネルでの発表

本発表では、日本社会にとって根本的な変革の時代でもあった占領統治の時代(1945-52)における、宗教・平和・メディアに関わる諸問題を論じたい。占領統治の初期、連合軍最高司令部が採用した民主化のプログラムが抱えていた逆説的な部分とは、厳格なメディア検閲

であった。長年にわたって国家神道の公的な教義を広めてきたメディアは、一部の重要な制限、とりわけ宗教報道に関わる制限を除けば、言論の自由が与えられていた。検閲官はしばしば、ただ神道の神の名が挙げられているというだけで差し止めた。そうした状況は連合軍司令部の一人をして、検閲とは「ほとんど必ず正当化される攻撃である」と言わしめたのである。他方、キリスト教の報道はまた別の問題を提起している。キリスト教は勝利者の宗教とみなされ、またマッカーサー将軍という全能にも思われた人物によって平和教育の礎として推進されたのだった。[英語のパネル]

山梨有希子 研究員

パネル「宗教間対話のパラダイム変換——〈公共哲学〉の導入——」 3月30日(水)

「宗教間対話のパラダイム転換：理解か、それとも平和の手段か?」 発表

宗教間対話は何のためにおこなわれるのだろうか。互いの理解を深めるという目的のためには、たしかにそれは有効であった。しかし、今日主流となりつつある、平和などの世界的な問題への共通の関心のもとにおこなわれる対話は、その目的にたいして適切な方法であるといえるのだろうか。宗教間の対立の克服が、そして宗教の多元性を認めることが混迷をふかめる現実への有効な応答となるのか。また、「平和」といった公共的な次元に属する問題を「宗教間」という限定された枠組みにおいて議論することの意味とはなんであるのか。このように考えるとき、宗教間対話をおこなうもの、それを論ずるものは、いま、根本に立ち返って議論しなければならない時期に来ているといえる。本発表は以上のような意味で、宗教間対話のパラダイム転換を目指す試みとなる。キーワードは「宗教と公共」「宗教的多元性と寛容」である。[英語のパネル]

山口亜紀 研究員

パネル「北東アジアにおける宗教と近代」3月30日(水)

「明治期啓蒙的知識人と〈宗教〉——ユニテリアニズムの果たした役割」 発表

近代国家の確立をめざして、明治期啓蒙的知識人の中で国家や社会の諸制度、機関、学術に関する議論が展開される中、福沢諭吉や中村正直をはじめとするオピニオンリーダーたちが、科学的認識方法を応用してユニヴァーサルな「宗教」の探求を根本方針として掲げるキリスト教一派の Unitarian と親和関係を持ちながら、日本国民としての統合に資する機軸と

して「宗教」を理解している。しかし、期待された Unitarianism はその後日本において伸展することはなく、日本の宗教界は近代ナショナリズムに転回していった。今回の発表では、西洋近代に由来する合理主義的「宗教」理解との交錯と反動に象徴される明治日本における「近代」を、宗教思想史の視点から見直すとともに、Unitarianism と社会進化論を契機とする比較宗教学の成立を、万国宗教大会開催にもみられるように世界的な潮流の一環として、同時代史的な視点から検討してみた。[英語のパネル]

わたなべ・まなぶ
本研究所第一種研究所員